

## ペッペルシテイン『カーストの神話生成的愛』<sup>1</sup>

岩本和久

ペッペルシテインの長編小説『カーストの神話生成的愛』第1巻は、アヌフリエフとの共著の形で1999年にアド・マルギネム社より刊行された<sup>2</sup>。ソローキンの『青い脂肪』やペレーヴィンの『ジェネレーション P』などが話題を集めた年である。その後、数年の断絶を経て、2002年末にこの小説の第2巻が刊行された<sup>3</sup>。

第2巻は長大な小説を完結させるものだ(第1巻は475頁,第2巻は540頁である)。第1巻はアヌフリエフとペッペルシテインの共著とされていたが、第2巻の著者の項目にはアヌフリエフの名はなく、ペッペルシテインの単著という形を取っている。アヌフリエフが記したとされる部分は第2巻にも少量、含まれているが、それらはイタリックで印刷され、他の部分と区別されている。

モスクワ・コンセプチュアリズムの若い世代に属するとされるペッペルシテインの作品は、コンセプチュアリズムの展開という文脈の中で検討することができるだろう。エプシテインはプリゴフを論じながら、ペッペルシテインにも言及している<sup>4</sup>。また鈴木正美は現代ロシア美術の動向を「ポスト・コンセプチュアリズム」として紹介しながら、ペッペルシテインの名を挙げている<sup>5</sup>。

と同時に、幻覚の中に独ソ戦(大祖国戦争)を描き出そうとしたこの小説は、たとえばペレーヴィンの『チャパーエフとプスタタ』やソローキンの『青い脂肪』と比較しうるものであり、ポストモダン的な歴史意識という問題と共に検討することができる。ナターリヤ・バピンツェヴァとアレクサンドル・ガヴリーロフによるインタビューの中でペッペルシテインは、ペレーヴィン『ジェネレーション P』、ソローキン『青い脂肪』と『カーストの神話生成的愛』を扱ったセミナーをゴリトシテインが行ったことを紹介している<sup>6</sup>。

歴史的な事象を素材としながら、荒唐無稽とも呼びうる世界を構築するこれらのテキストを無責任な戯れや歴史の書き換えとして非難することは容易だが、ソローキンの『青い

<sup>1</sup> 本稿は北海道大学スラブ研究センターにおける研究会「ロシア文芸の時空間」(2003年7月19日)での報告原稿に手を加えたものである。研究会での出席者から多くのご教示をいただいたことを感謝したい。

<sup>2</sup> *Ануфриев, С. Пепперштейн, П. Мифогенная любовь каст. Том первый*// М., Ad Marginem, 1999.

<sup>3</sup> *Пепперштейн, П. Мифогенная любовь каст. Том второй*// М., Ad Marginem, 2002.

<sup>4</sup> *Epstein, M. After the Future*/ trans. by Miller-Pogacar, A.// Amherst, The University of Massachusetts Press, 1995. P.358, n.20.

<sup>5</sup> 鈴木正美「障害としての芸術」『現代ロシア文化』国書刊行会, 2000年, 163頁。

<sup>6</sup> なお、同じ個所でペッペルシテインは、ペレーヴィンよりもソローキンに親近性を感じていることを告白している。「ペレーヴィンが何よりもアメリカ化のプロセスを反映しているとしましょう。その場合、我々やソローキンは反映というレヴェルにおいては、ヨーロッパのシナリオによる西欧化の過程と関係しているのです」*Пепперштейн, П. «В России тайны больше нет»*// Независимая газета. 04.11.1999.

( [http://exlibris.ng.ru/person/1999-11-04/1\\_nomoreingma.html](http://exlibris.ng.ru/person/1999-11-04/1_nomoreingma.html) )

脂肪』が検察に告発されたという事態の後では、そのような非難はむしろ危険なものといえるだろう。これらのテキストはあくまで小説、すなわち虚構の作品として構築されているのであり、その大胆な内容が歴史的空間に新たな光景を切り開くと同時に、ロシア史やロシア文化をめぐる諸イメージを批評しうるものであることに注意を払わなければなるまい。逆にこれらのテキストを歴史修正主義やナショナリズムと直結させることも、また安易な態度と言えらるう（とはいえ、ナショナリズムへの志向が、そこにまったく存在しないわけでもない）。

スキゾフレニアや幻覚を主題とし、アナグラムを多用したペッペルシテインの作品は、フロイトはもちろん、ラカン、ドゥルーズ/ガタリ、あるいはカスタネダといった20世紀後半の思想の芸術への影響の例として、検討しうるものでもある。

幻覚や精神分析に対する関心は、確実に現代ロシア文学の底流をなしている。幻覚の世界を扱うことで知られるベレーヴィンの作品にも、たとえば『ジェネレーション P』や『DPP (NN)』などにフロイトに対する言及を見ることができる。それらの記述はフロイトのパロディー化ともみなしうるものだが、ペッペルシテインの作品においては精神分析の流れを汲む思考が、エネルギーで流動的なテキストを支える原理となっている。

## 1. 作者について

モスクワ・コンセプチュアリズムの若い世代に属するとみなされているペッペルシテインはプリゴフやソローキンと同様、文学だけでなく、美術の領域でも活躍しており、また評論活動も盛んに行っている。

パーヴェル・ペッペルシテインは1966年5月29日に生まれた。両親はコンセプチュアリズムの芸術家ヴィクトル・ピヴォヴァーロフとイリーナ・ピヴォヴァーロヴァであり、ペッペルシテインという姓は創作されたものだ。ペッペルシテイン自身の説明によれば、この名前はトーマス・マン『魔の山』の登場人物ペーペルコルンを意識して作られたのだという<sup>7</sup>。

ペッペルシテインの両親は芸術家であったため、彼は芸術的な環境の中で成長することになった。両親は彼のために絵本や詩を作った。コンセプチュアリズムの芸術家や批評家は彼にとって身近な存在だった。彼の作品にはヨーロッパ文学への言及が多く見られるが、それらもまた彼の出自が持つ芸術性と無関係ではないだろう。たとえばカバコフの場合のように、コンセプチュアリズムの芸術には「絵本」や「挿絵」というジャンルからの影響が見られるが、ペッペルシテインの絵画もまた「絵本」との親近性を強く感じさせるものだ。

ペッペルシテインは1985年から87年までプラハ美術アカデミーで学び、1987年以降、「医療解釈学」グループの活動を開始する。このグループはペッペルシテインの他、セルゲイ・アヌフリエフ、ユーリイ・レイデルマンによって構成され、美術や文学の領域で活動を行ってきた（1991年以降はレイデルマンがグループを離れ、代わってヴラジーミル・フョードロフがメンバーとなった）。「医療解釈学」グループの活動は、Obscuri Viriのサイトでは次のように紹介されている。

<sup>7</sup> ミハイル・ヴラシンスキイによるインタビュー。Афиша. 2003. №1 (96). С.43.

『医療解釈学』のイデオロギーは、現代西欧哲学、正教や道教の神学的ドクトリンから精神医学や薬理学の用語までに到る、相容れない記述言語の合金に思えるだろう。それは故意に装われた精神分裂の症候を方法にまで高めた、まったく反復することのできない叙述の手法を作り出し、全てのものに同時にそっと触れることを、また、表面的な擬似科学的テキストにおいて超実証的な結果を獲得することを可能にする。とはいえ、狂気の装いは『医療解釈学』のアイロニーと切り離すことができず、読者や観衆は忍耐とユーモア感覚の双方に同じ程度、襲われることになる」<sup>8</sup>

1998年にはアド・マルギネム社より、ペッペルシテイン個人の名前で『老人のダイエット』が刊行された<sup>9</sup>。これは1982年から97年にかけて執筆された詩、散文を収めたもので、序文は『障害としての芸術』で知られる批評家ミハイル・リュクリンが執筆している。この書においてペッペルシテインのテキストは、「死者の礼拝堂」、「冷気と事物」、「食物」、「白い雪の家への私の道」の4つの部分に再構成されている。そこには死と生や現在、過去、未来の混在、事物や食物への関心、ナチス・ドイツへの関心といった『カーストの神話生成的愛』にも通じる要素を見ることができる。また、『老人のダイエット』に収められたテキスト「双眼鏡と片眼鏡」は、『カーストの神話生成的愛』の1部をなすものである（なお、このテキストは関連する3つのテキストと合わせて、単独の作品としてドイツ語に翻訳されている<sup>10</sup>）。

1999年には同じアド・マルギネム社よりアンドレイ・モナストゥイルスキイ編集『モスクワ・コンセプチュアリズム派用語辞典』が刊行されているが、そこにはペッペルシテインの用語にかなりの部分が割かれている。また、この辞典の巻末には簡潔な書誌が付されており、ペッペルシテインの初期の著作リストとしても利用することができるだろう<sup>11</sup>。

『カーストの神話生成的愛』の物語は1987年に想起されたものだという。その後、ペッペルシテインとアヌフリエフは、挿絵とテキストを記したノートを制作していった。中世の書物を思わせるこのノートをもとに、彼らは知人の間で朗読を繰り返していたという<sup>12</sup>。刊行された『カーストの神話生成的愛』にも、多くの挿絵が収められている。

『モスクワ・コンセプチュアリズム用語辞典』の書誌では、この小説は1991年のものとされている<sup>13</sup>。また、この『辞典』には「エニズマ」など、『カーストの神話生成的愛』に登場する造語の説明もなされている。

## 2. 小説のあらすじ

この小説は、第1巻第1部「ヴォストリャコフとタルコフスキイ」、第1巻第2部「正統的な丸太小屋」<sup>14</sup>、第2巻第1部「西への旅」、第2巻第2部「ナースチェニカ」の4つの

<sup>8</sup> <http://www.geocities.com/SoHo/Exhibit/6196/pepper-bio.htm>

<sup>9</sup> *Пеннерштейн, П.* Диета старика// М., Ad Marginem, 1998.

<sup>10</sup> *Anufriew, S., Pepperstein, P.* Binokel und Monokel/ Aus dem Russischen von A. Nitschke// Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1998.

<sup>11</sup> *Словарь терминов московской концептуальной школы.* М., Ad Marginem, 1999.

<sup>12</sup> Афиша. 2003. №1 (96). С.41. *Рыклин, М.* Пешки, ложки и кресты// Независимая газета. 20.01.2000. ([http://exlibris.ng.ru/kafedra/2000-01-20/3\\_peshki.html](http://exlibris.ng.ru/kafedra/2000-01-20/3_peshki.html))

<sup>13</sup> *Словарь терминов московской концептуальной школы.* С.211.

<sup>14</sup> «ОРТОДОКСИЯ – термин МГ, означающий «незамутненную» ориентацию на

部分から構成されている。

中間の2つの部分は、主人公ドゥナーエフの幻覚を中心に独ソ戦を描くものだ。その前半の「正統的な丸太小屋」は1941年から42年にかけてのソ連の防衛戦を舞台としている。主人公ドゥナーエフはコサック中尉の幻影に率いられ、プレスト、スモレンスク、黒海、モスクワ、レニングラードと各地を巡り、幻影の世界からソヴィエト軍を支援する。後半の「西への旅」は1942年から45年にかけての期間、スターリングラード攻防戦からベルリン陥落までの時期を舞台としており、ソヴィエト軍がヨーロッパへ進撃することになる。

第1部の最初と第2部の最後に置かれた2つの部分は、1941年から現代に到る物語を主に「現実」のレベルで描いており、独ソ戦の「幻覚」を描いた長い中間部分を挟む「枠」として機能している。この2つの部分では「幻覚」の部分とは異なり、伝統的なリアリズム小説の文体が用いられている。

### 「ヴォストリャコフとタルコフスキイ」

独ソ戦が始まり工場が疎開することになった日、工場の「芸術の家」の代表であるヴォストリャコフは党オルグのドゥナーエフに頼み、ピアノを運び出そうとするが失敗する。戦車が迫る中、ヴォストリャコフは生き延びるが、ドゥナーエフは逃げ遅れてしまう。

戦後、森の中の研究所で働くことになったヴォストリャコフは罪悪感にさいなまれ、ドゥナーエフの遺児サーシャを引き取る。ところが、死んだはずのドゥナーエフからサーシャに宛てて、奇妙な手紙が届くようになる。サーシャは結婚し、娘のナージャを生むが、ナージャが成長すると、今度はナージャに宛ててドゥナーエフの手紙が届く。手紙の中でドゥナーエフは自らのことを、魔術師として説明している。

### 「正統的な丸太小屋」

森の中に残されたドゥナーエフは無言の兵士、狐、内臓を抜かれた兎、熊、絨緞のように巻かれた狼といった幻影と出会う。やがて、小人のような「ボボ」が出現すると、ドゥナーエフの精液を吸い、さらには肛門からドゥナーエフを吸い込む。「ボボ」から吐き出されたドゥナーエフのもとへ僧侶たちが現れ、彼の頭の中に少女マーシェニカを埋め込む。彼女は「雪娘」であり、ドゥナーエフが危機に陥った際には、詩を朗読して彼を援助する。

【プレスト】森の中に残されたドゥナーエフは丸太小屋を発見し、そこで「陸軍中尉」（コサック隊長ホリョーヌイ）と出会う。陸軍中尉はドゥナーエフに飛行を教える。中尉とドゥナーエフは「ムーハ・ツォコトゥーハ」や「イヴァン・ツアレヴィチ」の協力のもとプレストに赴き、美女「シーニャヤ」と出会う。彼女の幻影はその後もしばしば出現し、ドゥナーエフを魅了する。

【スモレンスク】スモレンスクに赴いたドゥナーエフは、マーシェニカの声に従い、「男の子」を殺害する。そこへSSの制服姿の「カールソン」（リンドグレーンの作品の主人公）が現れ、ドゥナーエフをパンに変えると、背中のプロペラで「ゲーシ・レーベジ」を殺す。

【セヴァストーポリ】ドゥナーエフはキエフでおぞましい人物ペーチカ（ヴェーロチカ）

---

Неизвестное, соответствие Пустотному Канону. С.Ануфриев, П.П. Ортодоксия (в кн.: Латекс), 1988» – Там же. С.177.

と性交し、その後、太陽公ウラジーミルに変容する。続けてオデッサに向かった彼は、「魔法のテーブルクロス」を受け取る。コクテペリに移動したドゥナーエフは緑の眼鏡をはめられ、危機に陥るが、「テーブルクロス」のおかげで難を逃れる。その後、彼はセヴァストポリの戦場に出現すると、海中に沈むソヴィエトの艦船を「テーブルクロス」で包む。

【モスクワ】森へ戻ったドゥナーエフは「中尉」と共に、パルチザン部隊のメンバーを集める。モスクワに敵が迫る。モスクワに赴いたドゥナーエフはパンに変容し、地下鉄の線路を疾走しながら、モスクワが入れ子構造であったこと、つまり巨大なマトリョーシカであったことを発見すると、その内奥にあるであろう至福の存在「エニズマ」を探す。「中尉」は幻想に溺れたドゥナーエフを我に返らせ、2人は「不死のカシチェイ」を探し出す。ドゥナーエフは不死の老人のもとから「卵」を奪い、「中尉」は卵の中から針を取り出す。ドゥナーエフがこの針を噛み切ると、奇跡が起こり、ドイツ軍は敗退している。その後、夢の中で「КОМУ ЭНИЗМ」と叫んだドゥナーエフは、それが「К КОММУНИЗМУ」と響いていることに気付く。新年の祝いの夜、ドゥナーエフはパンに変容し、身体を切断される。

【レニングラード】レニングラード封鎖の中に赴いたドゥナーエフは、かつての工場での同僚ジーナと出会う。2人は一緒に生活するようになる。彼女の栄養状態を心配したドゥナーエフは、眠っているジーナに自らの精液を与える。飢えの中でドゥナーエフが「中尉」から貰ったコンデンスミルクを食べていると、「5 コペイカ」硬貨（пятак）が転がってくる。と同時に、雪のような綿毛（пух）が襲いかかり、彼は窒息する。回復したドゥナーエフは、誕生日に戦利品としてロバの尾を受け取る。この一連のエピソードは『クマのプーさん』を踏まえたものだ。プーさんの友だちのコブタはロシアでは Пятачок の名で親しまれている。また、戦利品のロバの尾は、プーさんの仲間であるロバのイーヨーが尻尾をなくすエピソードに由来している。

【双眼鏡と片眼鏡】片眼鏡をかけたナチスの将校クラナッハは、捕虜の審問を行いながら、パルチザン部隊の指導者ヤスノフを探す。『老人のダイエット』に収められたこのテキストへの注釈では、片眼鏡はプラトンの認識を、双眼鏡はスキゾフレニアの認識を象徴しているとされる。

## 「西への旅」

【スターリングラード】スターリングラードでドゥナーエフは、ノスタルジックな雰囲気包まれた知識人を集めて、幻想の世界のレジスタンス部隊を作る。彼らの前に、カールソンら敵側の幻影の乗った9層のメリーゴーランドが出現する。他方、ソヴィエト側には「愛の巨人たち」が出現する。戦いの中、負傷したドゥナーエフは一時的に吸血鬼になると、やがて巨大な輪型のパンに変容する。その後、「シーニャヤ」が出現し、ドゥナーエフにキスをすると、彼は消滅してしまう。

【カフカス】ドイツ軍はカフカスの最高峰エルブルス山への登山隊を組織する。隊員が次々と遭難していく中、1人生き残ったクラナッハは山頂に第3帝国の旗を立てる。その後、彼は混濁した意識の中で「ムーハ・ツォコトウーハ」と出会う。

【ロストフ・ナ・ダヌー】ロストフ・ナ・ダヌーでドゥナーエフは、「少女の世界」に入ってしまう。ドゥナーエフは少女に、世界を食べてしまった鷲の話語る。2人は川を果てまで下り、そこに張られていた「膜」が消えるのを目撃する。

【ウクライナ】ウクライナの教会には「男の子」の棺があり、ドゥナーエフはヴィイ（カールソン）の襲撃を受ける。カールソンのプロペラに磔にされたドゥナーエフは、天高く舞い上がり、太陽に焼かれて落下する。目が見えなくなったドゥナーエフは、村の風呂で女たちと性交するうちに、自分の仲間のマクシムカ少年に変容してしまう。

【白ロシア】クラナッハたちドイツ軍は宣伝のため、レーニンの偽の遺体を作り出す。他方、ドゥナーエフは医師アルザマソフの診療を受ける。アルザマソフのパンフレットにあるクラナッハの手紙を読んだドゥナーエフは、クラナッハが探しているパルチザンの隊長ヤスノフとは自分のことだと思えるようになる。やがて、ドゥナーエフは首吊り死体となり、空中に舞い上がる。下方には巨大なメリーゴーランドが現れる。幻覚から覚めたドゥナーエフは、「ロバのしっぽ」を用いて医師に決闘を挑む。ドゥナーエフは医師の名前がアイボリットであったこと、その正体が「ボボ」であったことを知る。続けて、ドゥナーエフは川の中からカバを引き出すが、それがピアノであったことを知ると、演奏を始める。

【ルーマニア】ドゥナーエフは知能を吸う吸血鬼「ググツェ」と出会う。国境の先には「空虚」が広がっている。ドゥナーエフとその仲間たちはアイボリットの指導を受け、国境を飛び越える。

【ハンガリー/ウィーン】ハンガリー国境には壁がそびえている。ドゥナーエフたちはカンガルーやカタツムリに変容し、高い壁を登る。壁を登った彼らは、騎兵の肩章の上に出る。肩章は庭園であることがわかる。ドゥナーエフと仲間たちは舞踏会に出るが、石油が招待を受けたために、会場が石油だらけになってしまう。ドゥナーエフは牡蠣に変容して、その場から逃げ出す。

【ヴェネツィア】肩章が庭園であった巨人の目は、ヴェネツィアになっている。ドゥナーエフの仲間の1人ラドゥジネヴィツキイは、ヴェネツィアで結婚式を挙げる。「櫂」に案内されたドゥナーエフは、そこに獣の世界から不死の空間に到る様々な世界を見る。

【ベルリン/モスクワ】ベルリンでドゥナーエフは「シーニャヤ」と結婚する。「赤の広場」に戻ったドゥナーエフは、「無名戦士の墓」の火に変容する。やがて、マネージ広場は巨大な森に変わり、巨大な丸太小屋が建てられる。火となったドゥナーエフは丸太小屋に燃え移り、火柱となって燃え上がる。

### 「ナースチェニカ」

戦後、現実の世界に戻ったドゥナーエフの生活は、幻想の世界と比べるとかなり慎ましいものだ。戦勝の日に記憶を失った状態で森の中で発見されたドゥナーエフは、その後、番人などの仕事を転々とする。

ある時、強盗に襲われたドゥナーエフは、戦前の生活や戦時中の幻想を思い出す。過去を取り戻した彼は娘に宛てて手紙を書くが、やがて犯罪に巻き込まれ、投獄されてしまう。

出所後、彼は倉庫の番をしながら、荷物を横流しして金を稼ぐようになる。ソ連が崩壊した時、彼は自らの幻覚の中でそのことが予告されていたことに気付き、幻覚の現実性を信じるようになる。

ある日、レストラン「ベキン」でヴォストリャコフを目撃したドゥナーエフはその後を追う。孫娘の居所を突き止める。彼は物陰から孫娘の姿を追う、ぬいぐるみやロック歌手のポスターで満たされた孫娘の部屋を覗き込む。やがて、若者の集うクラブに通うように

までなる。ドゥナーエフはある日、孫娘の後を追ううちに、8月クーデターで混乱する「ホワイトハウス」に紛れ込んでしまう。砲撃の中、彼は戦車の上に立つ孫娘を目撃する。

ドゥナーエフの孫娘ナージャは、ナースチェニカと名前を変えている。彼女は同じ森の中で暮らすタルコフスキイと交際するが、やがてLSDの幻覚に溺れるなど、暮らしが荒んでいく。ある夜、夜遊びから戻った彼女が、サナトリウムにあるガラスの扉の前で1人たたずんでいると、「こんにちは孫娘、こんにちは雪娘」と語りかけながら、サンタクロース（マロースじいさん）が現れる。戦時中の幻想の中に登場した「雪娘」、ドゥナーエフの頭に埋め込まれ、彼に助言を送っていた少女の姿は、ソ連後の世界を生きる孫娘の中に蘇り、ドゥナーエフとナースチェニカの姿のうちにサンタクロースと雪娘が再会を果たしたのだ。

### 3. 戦争文学と児童文学

第2次世界大戦を「ロマン」として描き出したこの小説を読むものは、『戦争と平和』を始めとするロシアの戦争文学の古典を想起することになるだろう。「ペッペルシテインは新しい『戦争と平和』を書き上げることに成功した」という評もあるほどだ<sup>15</sup>。この小説が「新しい『戦争と平和』」の名に相応しいかどうかはさておき、『戦争と平和』同様、古典的な小説の枠を破壊していることは確かである。

特にドゥナーエフの幻想によって語られる戦争の描写の部分は、近代的な小説を遠く離れ、古代の叙事詩に接近している。この様式に『マハーバーラタ』を想起することも可能だろう<sup>16</sup>、われわれ東アジアの読者はむしろ『西遊記』を思い出すべきだろう（『西遊記』もまたインドの叙事詩の影響下にあるのだが）。『西遊記』への関心は「西への旅」という表題にも現れているし、ペッペルシテイン自身もインタビューの中で『西遊記』に言及している<sup>17</sup>。「西への旅」の冒頭に添えられたペッペルシテインの挿絵（雲の上で踊る人々を描いたもの）も、『西遊記』を意識したものと思われる。

丸太小屋、マトリョーシカ、地下鉄といったロシア的な表象のあからさまな神話化も、この小説において目立つ点である。そうしたロシア的な要素はまた、子供の世界と結び付けられている。幻影の世界での戦争では、「ムーハ・ツォコトウーハ」、「グーシ・レーベジ」、「アイポリット」といったロシアの児童文学のキャラクターが、リンドグレンの「カールソン」や「クマのプーさん」といった西洋の児童文学のキャラクターと敵対しているのだ。これらの児童読み物はロシアにおいて、アニメーションの形で親しまれており、アニメーションのキャラクターが跳梁するポップな幻想を描いた、サイケデリックな作品としてこの小説を読むことが可能だ。

『カーストの神話生成的愛』において幻想に陥った主人公の意識は流動しており、時空を越え、他者のイメージを自らにまとう。しかし、戦争状態に置かれた敵と味方の壁、欧米の児童文化とロシアの児童文化の壁は超えられることがない。また、幻想の世界の主人公は現実の世界の戦士たちからは、切り離されている。戦争によって流浪の状態に置かれた主人公は、故郷や家族からも隔てられている。表題の「カースト」という言葉は、その

<sup>15</sup> レフ・ダニルキンによる。Афиша. 2003. №1 (96). С.39. Блатт・Брианнの評も参照。

Бурьян, В. Как я провел лето. <http://www.russ.ru/krug/kniga/19991005.html>

<sup>16</sup> Афиша. 2003. №1 (96). С.39.

<sup>17</sup> Пепперштейн, П. «В России тайны больше нет».

ような切断を意味しているものと解釈できるだろう。

アニメーションや映画への関心は、この小説に顕著だ。小説の最終章でナースチェニカの恋人となる男は有名な映画監督と同じタルコフスキイという姓をしており、ナースチェニカは彼と映画談義を交わす。また、ナースチェニカがLSDの幻覚に溺れるクラブの名は、タルコフスキイの映画のタイトルと同じ「ソラリス」というものだ。ペッペルシテイン自身も次のように語っている。

『カーストの神話生成的愛』は、映画なしでは理解できないタイプの文学なのです。この文学はある意味において、現代のロシアにハリウッドが存在しないことを補償するという使命を帯びているのです。およそ、『カーストの神話生成的愛』は小説ではなく、映画なのです。それも『ロード・オブ・ザ・リング』のような、半分はコンピューター・グラフィックで、半分は劇映画やコマーシャルな映画といった種類の」<sup>18</sup>

#### 4. 原初への回帰

『カーストの神話生成的愛』は戦争というナショナリズム的な主題を扱っている。しかし、そこでは公式的な史実の彼方に根源的なもの、すなわち食物や性といった生理的な要素や、それらと近い関係にある子供の文化が描き出されている。Мифогенная любовь кастという表題の頭文字 МЛК は「ミルク」を表すロシア語の単語 молоко の子音であり、「西への旅」でこの書は「ミルク」と呼ばれることになる。

コンセプチュアリズムの芸術家カバコフは、「医療解釈学」グループに見られる幼児性への志向について次のように語っている。

「『医療解釈学』の活動から私が受ける印象は、一方では非常に甘美で、快く、喜ばしく、また心を和ますものなのですが、他方では何か不足が、悲しいもの、幻滅させるものがそこにあるとも言わなければなりません。つまり、快い満足感と何かのまやかしの、満ち足りなさとの結合なのです。自分の考えを掘り返してみると気付くのですが、医療解釈学の言説の性質は、病気だから学校に行かないとママに訴えている子供の状況を想起させるのです」<sup>19</sup>

とはいえ、ペッペルシテインの説明によれば、彼のテキストに見られる生理的なもの、根源的なものへの志向は、歴史意識にもとづくもの、ポストモダニズム的な状況を踏まえたものでもある。

精神分析家ヴィクトル・マジンとペッペルシテインの共著になる『深い体験のキャビネット』は、フロイトによるミケランジェロのモーセ像分析を、現代的視点から論じたものだ<sup>20</sup>。その序文においてマジンは、ユートピアの夢が崩壊し、「歴史の終焉」が語られる時代に、父の法と結びついたモーセを再検討することの意義を語っている。

この序文に続くペッペルシテインの論文「イナゴと蜂蜜」は、この書における基本的な認識を示したものである。ここでペッペルシテインは人類の歴史を、次のように整理して

<sup>18</sup> Афиша. 2003. №1 (96). С.42.

<sup>19</sup> Тупицын, В., Кабаков, И. Разговор о "Медгерменевтике" // Место печати. №11. (<http://www.geocities.com/SoHo/Exhibit/6196/mp11-7.htm>)

<sup>20</sup> Мазин, В., Пеннерштейн, П. Кабинет глубоких переживаний. СПб., ИНАПРЕСС, 2000 (Кабинет: Е).



いる。(1)イナゴや蜂蜜の「採集」段階。(2)人間とそれ以外のものの区別が生じた「狩獵」段階。(3)社会や金銭が形成される「神秘主義・経済」段階。(4)社会集団相互の関係による「形而上的・政治的」段階。

「歴史の終焉」やグローバル経済が語られる現代は、「形而上的・政治的」段階が終結し、「経済」段階に回帰した状態にあると、ペッペルシテインは考える。そして、彼は「採集」段階への回帰を夢想する。

「我々は(明らかに)古い『政治的歴史』を離れ、新経済段階に入りつつある」

「この『修正』の後、人間はついに人間(つまり『獵師』)であることをやめるだろう。彼は『熊』になるだろう。つまり原初的な『植物採集と収集』段階へと『回帰』するだろう」<sup>21</sup>

『カーストの神話生成的愛』に見られる生理的なもの、原初的なものへの関心は、こうした歴史観とも無縁ではないだろう。この小説では戦争という「政治的」世界が、森の中で意識を混濁させた主人公が陥る原初的な「採集」段階の世界と混在しているのだ。

『深い体験のキャビネット』と同じシリーズの一冊『キャビネット：世界の光景』に収められたペッペルシテインのエッセイ「行商人の歌」は、『カーストの神話生成的愛』で描かれている「エニズマ」をめぐるドゥナーエフの夢を解説したものである<sup>22</sup>。このエッセイでペッペルシテインは、忘却について語ろうとする。人々は記憶を重視し、過去を保存しようとするが、むしろ忘却が重要である。未来から過去を解放するためには、死を忘却しなければならない。こうした議論が展開された後、ドゥナーエフの夢が紹介される。このエッセイにおいても、時間からの、歴史からの解放が主題となっている。

したがって、退行的な幻影をとりとめもなく語っているかのごとき『カーストの神話生成的愛』は、それほど幼稚なテキストではない。それは物語やアニメーションのイメージを積極的に取り込んでいくポップなテキストであるだけでなく、戦争の歴史という時系列、敵と味方という政治的集団の枠を保ちながらも、サイケデリックな幻影のうちに、私と他者の境界、時空の境界を揺るがせていく思索的な小説でもあるのだ。また、ロシア史やロシア文化を照射しながら、現代ロシアのポストモダンの状況を問い直そうとする、アクチュアルで野心的な小説なのである。

---

<sup>21</sup> Там же. С.17-18.

<sup>22</sup> *Пепперштейн, П.* Песня коробейника// Кабинет: картины мира II. СПб., Скифея, 2001 (Кабинет: Ё). С.12-23.